

平成 28 年 3 月 11 日
国立成育医療研究センター
石川洋一

小児の誤飲防止策の検討

1. 最も重要なのは保護者と社会に対する啓発

社会的な啓発が遅れているため、保護者と国民は小児の誤飲の現状を知らない
小児誤飲の原因と予防方法、救急時の対応を知らせる必要がある

これは国を挙げて啓発を進める方向への議論も必要ではないか

消費者庁・厚労省・製薬会社・医療関係団体・学校教育

・保護者が一番重要な砦

しかし頑張っても保護者の対応には限界がある

- ・ 2～3歳でも冷蔵庫は開けられる
- ・ お兄ちゃんが開けて弟が飲んでしまう
- ・ 美味しい薬は保護者の居ない時に積極的に飲もうとする
- ・ おばあちゃんが水を取りに行ったほんの一瞬でも飲んでしまう

2. 次に検討すべきは保護者を助けるCRSF容器

- ・ 保護者の限界を守るには小児が開けられない容器に入れるのが良策
 - ・ 薬をまとめて入れる、小児が開けられない医薬品箱を普及させる
 - ・ 小児が開けられない包装に入れて保護者に渡す
- ・ ただし、これらの実施は国民への啓発と同時進行でないと、不便になるだけの印象を与えがちで、実行する製薬会社や薬局・医療機関にも負担となる可能性が大きい。理由の理解が進むと円滑な導入がしやすいと考えられる
- ・ 小児誤飲に協力する企業・薬局・医療機関には歓迎の評価を、例えば行政的なインセンティブを提供するなどの制度誘導も議論すべき

2-1. 製薬会社がCRSFを提供する

- ・ 日本では海外と違い、薬は薬局や医療機関で製薬会社の包装を開封して、1包化など服薬で間違いのないように調剤をしている。海外では、錠剤や水剤を1瓶単位で渡す場合が多いので瓶の口をCRSFとすることを義務化して効果を上げたが、日本ではPTPや瓶から出して調剤するため製薬会社の対応だけでは全体をカバーできない可能性がある
- ・ 将来的には製薬会社による容器の改良に期待したいが、生産ラインからの変更でもあり実施対応は遅れることが予測される

2-2. 薬局や医療機関がCRSF容器を提供することを早期に検討

- ・ 同時にポスター、チラシ、ニュース、お薬手帳などで小児誤飲の啓発を行うことが円滑な導入に重要となる
- ・ 容器費用等について、誰がどう負担するのか（薬局や医療機関だけの負担増になるなら積極的になりにくい）という問題にも配慮が必要ではないか（東京都で実施したアンケート結果参照）

以上